

歎異鈔における人間生活と念仏道の関係考

松 田 隼 人

『歎異鈔』は全てにわたって人間生活と念仏道の関係を示された御文と思うが、しかしその関係が特に現われているのは第四章、第五章、第六章であると思う。第四章においては念仏が即大慈悲であること、第五章は念仏が即孝道であることと第六章は念仏が即師弟道であることを示され、こういう人間生活の生き方によって我々のしあわせがあるというものである。以下順に考えてみることにする。第四章の御文は「慈悲に聖道浄土のかはりめあり聖道の慈悲といふはものを憫み悲み育むなりしかれども思ふば如く助け逐ぐることを極めてありがたしまた浄土の慈悲といふは念仏していそぎ仏に成りて大慈大悲心をもて思ふが如く衆生を利益するをいふべきなり今生にいかん愛し不便と思ふとも存知のごとく助け難ければこの慈悲始終なししかれば念仏まをすのみぞ末徹りたる大慈悲心にて候ふべきと云々」とある。ここでは人間生活の根底となる慈悲心について聖道の慈悲と浄土の慈悲の関係を示され、前者が自分の力で一切衆生を憫み慈悲なる心で人の心を

育てるというのに対し「しかれども思ふが如く助け逐ぐること極めてありがたし」で、しかし思うようには助けること極めてまれであるというのである。だから聖道の慈悲に対するつまづきで、浄土の慈悲が前提となる。「浄土の慈悲といふは念仏していそぎ仏に成りて大慈大悲心をもて思ふが如く衆生を利益するをいふべきなり」とあり、浄土門でいう慈悲は智慧と慈悲を自分が忙いで獲得し大慈大悲の心をおこすならば思ふように一切衆生を救うことができるというのである。いいかえれば浄土の慈悲は「念仏して」とあるから名号を聞信するところに自分が助かるのであり、その自利成就を通じて利他を成就させ一切衆生を思うように利益させて頂く、これが浄土の慈悲であるというのだ。更に「しかれば念仏まをすのみぞ末徹りたる大慈悲にて候ふべきと云々」とあり、念仏をまをす浄土門の大慈大悲が末徹りたる大慈悲心であるという。つまり第四章は、まず聖道の慈悲についてのべられ、次に浄土の慈悲についてのべられ念仏まをすことが末徹りた

る大慈悲心であるというのだから、この御文の中心は念仏往生ということが主体のように思われる。しかし、衆生済度は念仏申すところに現われるのであり、まず仏に向う願往生の心が問題である。悪いことをして慈善事業をしてもこれは本當の慈悲心ではない。真実に向う純粹な自利成就が必要である。つまり仏に向う心が問題であり、純粹なる願心を願作仏心というが、これこそ信心の中心であり、それを通じて開顯されるのが念仏即大慈悲の利他成就ではないのか。願作仏心がそのまゝ度衆生心になるといわれるのもそれであり、また往相の歩みがそのまゝ還相となつて自利利他一如の念仏道が成就されるというのもそれである。それこそ純粹なる不退転の念仏が問題で、若しその念仏道が成就されるならば、それはそのまゝ大慈悲となつて衆生の救済となる。したがつて念仏をとなえて浄土に往生させていただく浄土門の慈悲だけが末徹りたる大慈悲心であるというのだ。続いて第五章の御文は「親鸞^③は父母の孝養のためとて一遍にても念仏まをしたること末だ候はずその故は一切の有情は皆もて世々生々の父母兄弟なり何れも／＼この順次生に仏に成りて助け候ふべきなりわが力にて励む善にても候はゞこそ念仏を廻向して父母をも助け候はめたゞ自力を棄てゝいそぎ覺を開きなば六道四生のあひだいづれの業苦に沈めりとも神通方便を以てまず有縁を度すべきなりと云々」まず最初に親鸞は、亡き父母の供養

のために念仏をまをしたことは一度もないというのだ。誠に冷たいようであるが、しかし孝道に関する親鸞の基本姿勢で、念仏と生活の関係交渉を知る大切な内容だと思ふ。四才にして父を八才にして母を失つた親鸞にとっては私達以上に両親を恋うる気持ちはあられたと思う。このことがやがて大地においては法然、彼岸にあつては本願をたずねられた。この本願名号が廻向顯現して愚禿親鸞の生命となつたのである。つまり念仏を孝道にふりむけるのでなく、如来本願の智慧のなかに眞の孝道があるということである。いいかえれば南無阿彌陀仏のご恩徳の中に生きゝる時、そこには祖先のためとか両親とかそういう小我とか功利的なものは一切生まれてこない。念仏そのものが生命であり人生でありわが生活であり他をさしはさむよ地がないのである。ましてや法事や仏事が形式に流れ、ただお供えものをするというのでは決して父母の孝養のためになるわけではなく眞の孝道は南無阿彌陀仏の智慧と慈悲にうらずけられたものでなくてはならないということである。そのわけは一切の生あるものはみな生まれかわり死にかわりしているうちに父母兄弟となつたものであるから現世の父母だけに限られたものでないというのである。これは親鸞の衆生觀である。なるほど考えてみれば父母兄弟は一世や二世の族人ではない。久遠劫末の輪廻の旅人である。しかもその旅人は如来の前にはみな平等であり父母も

兄弟も御同朋御同行としての族人である。このことは大悲本願の大信海に開顕された姿であるが、親鸞はしかる故に一切を救わずにはおれないという心境になられたと思う。「何れもく」は「助け候ふべきなり」にかゝっている。また「この順次生」も「仏に成りて」もおなじことがいえる。「何れもく」は一切衆生であり、この「順次生」はご同朋と共に念仏して願往生の道を行歩する時、順次生次の世に至るというのである。つまり何も救うことのできない自分ではあるが、本願力によって救われることを知って、それを受取り信心決定して往生成仏の一道を歩ませていたゞく、これは如来の本願力であるから「仏になりて」となるのである。「順次生」が待たれるのは弥陀と同一の証果に至るからである。だから一切衆生を救うことができるのであり、その証果の大因は信確立という因によって果が生じるのである。いいかえれば自利成就によって利他の世界が開けてくる。往還二相も同じことで往によって還がおこるわけだが、しかし二つとも名号のなかに摂められては我々には大慈悲となつて下つてくるのである。曇鸞和尚『和讃』には「弥陀の廻向成就して往相還相ふたつなりこれらの廻向によりてこそ心行ともにえしおなれ」とあるが、まさにこのことだと思ふ。親鸞が父母の孝養のために念仏を申したことの第二の理由は「わが力にて」とあるように、わが計らいにて励む善でなく、如来廻向

の大善大功徳であり他力の大善である。つまり、純粹な念仏か、自力雑毒の念仏かどうかということだが、聖なる念仏を煩惱の手段としてとりちがえてはならないということだ。

「神通方便……云々」というのもそれである。だから親鸞の真意はまず三世一貫の大行に乗托して念仏申すことでありこの念仏が即孝道であり更に成仏が孝道の成就でありこの念仏をぬきにして孝道はないというのがこの御文の内容だと思ふ。続いて第六章を見てみよう「専修念仏のともがらのわが弟子ひとりの弟子といふ相論の候ふらんこともてのほかの子個なり親鸞は弟子一人ももたず候その故はわが計にてひとに念仏をもさせ候はゞこそ弟子にても候はめひとへに弥陀の御催にあづかりて念仏まをし候ふ人をわが弟子とまをすこと極めたる荒涼のことなりつくべき縁あれば伴ひはなるべき縁あれば離るゝことのあるをも師を背きて人につれて念仏すれば往生すべからざるものなりなんと言ふこと不可説なり如来より賜りたる信心をわがものがほにとりかへさんとまをすにやかへすゝもあるべからざることなり自然の理にあひかなはゞ仏恩をも知りまた師の恩をも知るべきなりと云々」ここでは、まず最初に誤れる念仏と誤れる師弟道に対する見解を示されているが『改邪鈔』にも「わが同行ひとの同行とけん別もてこれを相論する謂なき事」とあり、名聞利養の心によつて阿弥陀仏と凡夫と凡夫の善知識が混同されている親鸞の嘆

きの言葉を申されたものと思われる。そして親鸞は弟子というものは一人ももっていない。なぜなら自分の力で念仏を申させるようにしたのならそれは自分の弟子といってもよいが、しかし弥陀如来の計らいによって念仏申すことになっている人を自分の弟子というのはとんでもないというのだ。

「弥陀の御催に」あづかつてのことで、わが弟子ひとりの弟子という争いは如来の本願に対する曇りからくることで、教法を自専し本願名号を私するところに荒涼というすさまじい言いがおこるのである。『口伝鈔』には「弟子同行を争い本尊聖教を奪い取ること然るべからざるよしの事、常陸国新提の信樂房聖人の御前にて法文の義理故に仰を用ひ申さざるによりて突鼻にあづかりて本国に下向のきざみ……本尊聖教を取返すこと甚だ然るべからざることなり……親鸞は弟子一人ももたず何事を教へて弟子といふべきぞやみな如来の御弟子なれば皆共に同行なり……念仏往生の信心を獲ることは釈迦弥陀二尊の御方便として発起すと見えたれば全く親鸞が授けたるにあらず……如来の教法は総じて流通物なればなり」とある。一つは別ねなければならぬものとは別れていること、二つは念仏がものをいっているようでも大法を忘れ煩惱にものをいわせて生きていること、三つは弟子自専の浅ましさを我に生きる人間の誤りを抜てきされ、四つは大法は如来のもので一切衆生界に賜るものだからこれは自専してはならな

いといわれ、五つは大法は流通物で法徳の自然であることを示されている。つまり第六章の御文は、まずわが弟子ひとりの弟子という誤れる念仏の問題が提示され、続いて親鸞の信念、そして因縁の締観、自然の師弟道という千古の断言がなされるのであるが「自然の理にあひかなはず」で親鸞のこの道理や大法は如来本願の領解で、これ以上の法則はない。『未燈如』には「善知識をおろかに思ひ師をそしる者をば謗法の者と申すなり親をそしる者をば五逆の者と申すなり」とあるが親鸞は決して師弟との乱れを放任されたのではない。「自然の理にあひかなはず」で真正な師弟道は如来本願に乘托し念仏申すなかにあるのであり、第四章の慈悲も第五章の孝道も第六章の師弟道も結局は帰するところ念仏一つにおさまるのである。よって人間生活と念仏道の関係は日々念仏一つでことたりるということではなからうか。

- 註 島地大等著『真宗聖典』昭和五十二年八月 明治書院発行
- (1) 歎異鈔 二十三の一ページ
 - (2) 歎異鈔 二十三の二ページ
 - (3) 歎異鈔 二十三の三ページ
 - (4) 和讃 十一の二十六ページ
 - (5) 歎異鈔 二十三の三ページ
 - (6) 改邪鈔 二十六の五ページ
 - (7) 口伝鈔 二十五の六ページ
 - (8) 未燈鈔 二十一の十六ページ

（作陽短期大学助教授）